

暗唱 李晴

高校生の頃私は朝早く起きて校庭へ行き暗唱をするのがとても好きだった。その頃は腕時計などは持っていなかったの、一旦目を覚ましたらもう一度また眠ることが出来なかった。そういう訳でどんなに早くても目を覚ましたらすぐに起き上がったものだった。ある時ひどく早く目を覚ましたことがあった。宿舎のドアを開けてみると空には星が点点と光っていて、明るい月がまだ中空に懸かっていた。そっとドアを押し開けて外へ出て、校庭の長い小道を歩いた。月明かりの下の校庭は全てがぼんやりとし見え、ひっそりと静まり返っていた。

学校は起床時間にならないと電灯を点けなかった。そのため早起きをして暗唱をしに行くときは、いつも手にランプを下げたものだった。そのランプは私の手作りの油灯だった。ごくありきたりのインク瓶と、綿糸一束、自転車のタイヤについている空気入れバルブが一個、材料はそれだけだった。バルブのなかに綿糸を差込んで灯芯にし、バルブの先にはナットをつけて、ひねると灯光が大きくなったり小さくなったり、明るくもなり、暗くもなるようにした。さらに風を防ぐために、インク瓶の外側にダルマのようなガラスの覆いをつけた。光りは明明として、ちょうど村の人が夜分に家畜に餌をやるときに使う馬灯に似ていた。時に風がさっと吹き付けると、覆いのかぶさったランプはゆらゆらと揺れ、光りがきらきらとこぼれて、まるで光り輝く星を下げて歩いているような感じがしたものだ。

私は静けさが好きな性格なので、早朝の暗唱もよく人目に付かない静かなところを探した。その頃私が好んで選んだのは校庭の片隅の豚小屋だった。実際、豚の糞尿の匂いを除けば、よく掃除が行き届い

た清潔なところだった。砂利を敷いた小道、石板を積み上げた囲い、少し湿っぽく霧のかかったような大気、ひんやりと冷たい石板。その上に腰をかけて暗唱をするのは本当に何もかもが新鮮で、清しく、爽快な気持ちになったものだった。暗唱をするものは、歴史、地理、文学、英語のほかに、さらに毎日必ず自分に課するものがあった。それは「唐詩三百首」の本で、黄色に変色してしまった麻の紙に昔の字体で石版印刷されたとても古いものだった。一首一首、一頁一頁、明け方の風がふっとランプをかすめてゆくなか、私はゆっくりとすべてを暗唱していった。この日々、一日一日と過ぎてゆく日々、すべてはこのランプの下で、私の朗朗と暗唱をする声のなかから繰り返し、繰り返しあられ通り過ぎていったものだった。

私が引き起こす騒ぎに、豚たちも慌てふためき、大混乱をおこした。豚たちはふがふがと鳴き声を上げながら突付きあい、ひどく興奮をして飛び上がり、鼻先で私が囲いの上に置いたランプを突付こうとするものもあった。しかし、日がたつにつれ、そんなことにもすっかり慣れてしまった。

私は私で暗唱をし、豚は豚の眠りをむさぼっていた。豚たちが互いに寄り添いあい、ともに餌を食べ、鼻を鳴らしているのを見ると、私の心はどんなにか落ち着いたことだったろう。彼らと一緒にいると辺りのぼんやりとしたものや、ゆらゆら揺れ動いているものや、急に明るくなったり暗くなったりする、何だかわけのわからないものは全てたちどころに私のところから遠く離れていった。

冬になると早朝の暗唱はもう心の満ち足りたものとは言えなくなってきた。豚小屋は校庭の一隅にあ

り、冷たい風が学校の低い塀を越えてひゅうひゅうと吹き渡ってくる。私はランプが風で吹き消されないようにいつも風上に座って風を遮った。手はしびれ、足もしびれ、耳もしびれてしまった。黄色い光の輪の下で脚をばたばたさせながら、空が明るむまで暗唱を続けた。時には雪が降ってくる時もあった。小さな雪の花がくるくると廻りながら降り、ランプの覆いの上にそっと落ち、ツツと小さな音をたてる。まるで無数の小さな蛾が飛んでいるようだった。

冬休みに入り私は家に戻った。母は私の霜やけで赤く腫れ上がった手を見ると息を呑み、涙をこぼした。私の両脚はすっかりただれてしまい、ズボンに脚にべったりとくっつき、脱がすことができなかった。さらにひどかったのは、早朝の暗唱にすっぴんのめり込み、自分でもわからないほど体力が消耗していたことだった。家に戻るなりベッドに倒れこみ、7日7晩食事のときを除いて、ずっと眠りつづけ、母を心底心配させてしまったのだった。

今、私はもうランプを使うことは無くなった。しかし誰かが「学校へ何年も行ったけど、何を勉強したのか覚えていない、時間の無駄だった」というようなことを聞くと、私はすぐにあの頃のひたすら知識を求めた毎日、「一寸の金をもってしても一寸の光陰を買うことは出来ない」という諺のとおり、時間の足りなさを嘆いた頃のことを思い出す。

(2001年7月号より)

〔訳者から：翻訳の際に李晴の学校生活に関し、訳者がいろいろと質問をしたのに対し、下のような説明が届きました。彼女の作品の背景といえるもので、一層これまでの作品の内容や登場人物に近づく事ができました。ご参考までにお読みいただけたら幸いです〕

私は文化大革命が始まったばかりの頃に生まれま

した。でも、私の故郷は大きな町からはとても遠い辺鄙なところの、貧しい小さな村だったので、1960年代には基本的に革命運動の大きな影響や衝突はありませんでした。私が小学校に入ったとき学校はまだ正常に授業をしていました。1年、2年のときは毎日ランドセルを背負って学校へ行きました。4年、5年生になると学校は基本的に授業はおこないませんでした(大体74年ごろのことだったと思います)。春になり新学期が始まると、私たちはすぐにツルハシを担いで長く伸びた草で荒れ放題の山の斜面に行き、開墾をしました。そこは学校から随分と離れた山奥で2時間ほどかかってやっとたどり着くところでした。朝早く、時にはまだ空に星がある頃に起きて出発します。地面を掘ったらすぐに種をまきます、私たちの学校は大体500ヘクタールの土地に種を蒔きました、蒔いたものはアワ、キビ、トウモロコシ、小麦、ジャガイモ、ごま、えんどう豆、からし菜などでした。男子生徒は前に出て穴を掘り、女子生徒は後ろにいて種の入った腕を抱え、一つの穴に一粒の種を蒔いて行きます。皆裸足でした。穀物の苗が伸びてきたら、すぐに鋤をつかって除草をしたり、苗の間引きをします。最低3回は除草をしなければなりません。だから、夏中激しい陽の光の下で働くことになり、学校へ行くことなどありませんでした。一番忙しく、とても疲れたことは、夏と秋の収穫の時でした。私たちは種を蒔いた作物を今度は収穫して、穀場まで運ばなければなりません。ジャガイモを掘りおこしたり、ムギや穀類を刈り取ったり、すべて2本の手で鎌を使って刈り取らなければいけません。昼も家に帰ってご飯を食べず、簡単な食べ物を持参して、畑で食べました。仕事が終わると、皆一人ずつ背中にジャガイモや穀物が入った袋を担いで村の脱穀場まで持って行きます。私たちの小学校にはおよそ20人ほどの生徒

がいました。その子供達にとって 500 ヘクタールの土地の穫り入れは本当に疲れるものでした。

冬になると私たちには段々畑の修理がありました。崩れた縁を直したり、石を運んだり、手押し車で土を運んだり。私の故郷の冬はとても厳しく、子供にとっては本当に辛い労働でした。春や秋はさらに植樹もしました。だから一年間四季の農作業について私は大体のことをいまでもやれます。そのほか、私たちの学校では数百匹の羊と百匹ほどのウサギを飼っていましたので、秋には冬の間の餌として一人数百斤の草を用意しなければなりませんでした（「一掬いの冷たい羊肉」）。

私の学校は「騾先生」でも書いたように先生が一人、教室も一つのとても小さなものでした。教室は狭くガランとしていて、まともな机やベンチがありませんでした。レンガを積んで二つの円柱のようなものを作って、その上に板を載せます。丈の高いほうを机にし、低い方をベンチにしました。主な科目は国語と算数の二科目で、その他の音楽や、美術、体育、理科などは習いませんでした。時には歌を歌うこともありましたが、当時の“革命”の歌、例えば‘文化大革命は本当に素晴らしい’といったものでした。一つだけの教室には複数の学年の生徒がいました。先生が一つの学年を教えたら、次の学年に移るといった‘複式学級’で、中国の農村では何処もこんな風です。

1978 年、文化大革命が終わったばかりの頃、私は村の初級中学 2 年生になっていました。以前の中国の学校は春が入学の時期でしたが、1978 年から秋に変わりました。そこで、1978 年の春に、半年の時間の余裕があったので、初級中学 2 年生は皆地元で集中的な学習と復習を受けました。小学校の後半には全然授業がありませんでした。教科書は全部新しいものでしたけれど、一頁も開いたことはありません

でした。ですからその当時の私の基礎学力は随分低いものでした。でも私の作文の成績はよいものでした。労働のかたわら随分たくさん小説を読み、数百の唐詩を暗記しました。私の記憶力もとてもよかったです。新しく学ぶものは先生が教えてくださると直ちに覚えました。それで重点高校にも合格できたのです。私のいた受験準備のクラスには 50 人以上の生徒がいましたが、合格したのは私一人でした。武先生は私に本当に善くしてくださいました（「六月の思い出」）。

高校の私のクラスには 40 人以上の学生がいました。そのほとんどは県城(行政の中心地)の比較的裕福な地域の出身で、私のようなとても辺鄙な貧しい地域の学生は非常に少なかったのです。県城の学生は学校生活に恵まれていたといえるでしょう。彼らは小学校は 6 年間、初級中学は 3 年間だったように覚えています。でも私たち貧しい地区の子供達は小学校は 5 年間、初級中学は 2 年間だけでした。その他彼らは、音楽、美術、体育、歴史、地理、化学、物理、英語などの課目を習っていました。だから彼らと私との学力の差は本当に大きく、私は随分努力をして勉強をしなければなりませんでした。朝早く起きて暗記をして、やっと彼らに追いつき、追い越せました。(訳者：岩田温子)

・・*・*・*・*

この後、李晴は県の師範学院の国文科に進み、18 歳で教員として中学校で国語を教えることになりました。10 年間の国全体の大混乱に加え、貧しい農村にたまたま生まれてしまったために与えられたさまざまな試練、それを乗り越えるために払った努力と気迫には翻訳をしながら圧倒されてしまいました。これで私の友人李晴の学生時代の話を終えます。つたない翻訳にお付き合いくださいましてありがとうございました。(岩田温子)